

祖国戦争

この二世紀という間、小規模な反乱を除いては、日本では対外的にも国内においても戦争が起こらなかった。ペスト〔黒死病〕のような伝染病は、天然痘や性病を除いて日本人は経験していない。それ故他国では人口増加の妨げとなるこうした災厄を日本人は知らない。とりわけ人類を根絶にまで導く巨悪（戦争）を知らないでいるのは、幸せなことである。健全な気候に恵まれ、不断の平和を享受している国の人口が増えないはずはない。日本がまさにそうである。（『日本幽囚記Ⅲ』人口と軍事力¹）

ゴロヴニンの日本幽囚は、ヨーロッパではナポレオンのモスクワ遠征の時期と重なる。フランス革命・ナポレオン軍を範とする徴兵制による「国民軍」の創設は、それまで金銭で雇われた傭兵中心であったヨーロッパの戦争の在り方そのものを大きく変えることになった。

一八一二年四月（グレゴリオ暦）、ゴロヴニン達が獄中で逃亡計画を練っていた頃である。ナポレオンは六十万を超える大陸軍を率いて、ロシア遠征へと出発した。数の上で圧倒的に不利であったロシア軍は、戦闘を避けて退却戦術をとった。「アレクサンドルはじめロシアの指揮官一同もその当時、ナポレオンを誘引しようなどとは考えてもいなかった」とレフ・トルストイは書いている。それは「誰の計画によって行われたことでもない」という。「それはただ将来おこるべきことも、ロシアの唯一の救いが何であるかも、洞察しえなかった無数の戦争参加者の陰謀や、目的や、希望などの、複雑きわまりなき交錯から生じたのである。」²九月一日、ナポレオンの大陸軍はモスクワに入ったが、ロシア軍の姿は見えず、廃墟となった木造の建物から火が出て、市街の大半は炎上した。灰燼と化した街で、ナポレオンはロシアとの和議に一縷の望みを託して特使の到着を待ち続け

たが、誰一人訪れる者もなく、一〇月一九日に大陸軍は退却を開始した。大量の戦利品を抱えて遅々と進まないナポレオン軍を、冬将軍が襲った。将も兵も防寒服の不足と飢えに苦しみ、執拗に追撃してくるロシア兵や農民達の義勇軍によるゲリラ攻撃に遭って、軍は壊滅状態に陥った。ロシア国民の間に強烈な愛国主義の感情を引き起こしたこの戦争は、まさに「祖国戦争」の名にふさわしいものとなった。国境のニーメン河を越えてロシアを脱出できた兵の数は、約二万であったといわれている。⁽³⁾

幽囚中のゴロヴニンは、長崎に来航したオランダ船からの情報によって「モスクワ陥落」の第一報を知ることになる。「ロシア側は自暴自棄となって、自らの首都を見捨て焼き払ったという。そしてモスクワに至るまでのロシア全土が、フランスの統治下になった」という日本人の言葉に、そのような情報は「オランダ人の発明」であるとゴロヴニンは一笑に付している。⁽⁴⁾

箱館へ来航したディアナ号からゴロヴニン達の元へ官報が届けられ、戦況の詳細が明らかになる。

私達は、官報を貪るむさぼるように読んだ。敵軍のロシア侵攻からスモレンスキー公爵の戦死に至るまで詳細な解説がされていた。日本人達も私達同様に、どのような戦術によってかくも短期間の間に戦況が変化したのかを知りたがり、最も著しい戦果の記事を翻訳してくれと頼んだ。フランス軍はモスクワでロシア軍に包囲され、そこから強行突破を計ったのだが、ほぼ全軍がロシア領内で戦死する結果となったのだと教えてやると、日本人達は手を打って、スモレンスキー公爵はまさに日本流に戦ってみせたのです、わが国の兵法の一つに、敵を可能な限り自国の奥地まで誘い込み、そこで四方を強力な軍隊で取り囲むというものがありますと言った。私達はこの比較に苦笑して、日本人達の推論に従えば、わが不死身の名将クトゥーゾフは、フヴォストフが日本人部族を襲撃した本の中で戦術を学んだことになるだろうと冗談を言い合った。⁽⁵⁾